

第7章

アフリカにおける宗教と政治

——研究動向と比較への展望——

はじめに

ここ10年ほど、宗教と政治に関わる議論が盛んになされているが、その文脈は大きく分けて二つあるといえよう。一つは、宗教復興や宗教的背景をもつ紛争の増加への関心からくるもので、ケペルの『神の復讐』（邦題『宗教の復讐』）やハンチントンの『文明の衝突』に代表される文脈である（Kepel [1991], Huntington [1993] [1996]）。近代化・世俗化へと向かう大きな歴史的流れのなかで、宗教は私的領域に押し込められ、脱政治化させられていたはずであった。ところが1970年代以降その流れは反転し、イスラーム復興運動やキリスト教ファンダメンタリズムをはじめとする宗教復興の動きが世界各地で活発化した。さらに、1990年代、冷戦終結によって「東—西」の対立軸が意味を失ったことで、宗教が新たな主要な対立軸としてクローズアップされるようになったのである。

もう一つは、政治的民主化における宗教組織の役割への注目である。上の第一の文脈で登場するのが、原理主義としばしば称されるような宗教運動（イスラーム、キリスト教を問わず）であることが多いのに対し、こちらの文脈で主に言及されるのはキリスト教の主流派教会（ローマ・カトリック、およびプロテスタント）である。ハンチントンは1970年代半ばから1980年代にか

けての民主化の「第三の波」を引き起こした要因のうち、経済成長の次に重要なものとしてカトリック教会の動きをあげている (Huntington [1991: 85])。東欧、ラテンアメリカ、そしてアフリカ諸国においても、民主化運動でキリスト教会が大きな役割を果たした例が数多く報告されている (たとえば Witte Jr. ed. [1993], Gifford ed. [1995])。政治権力の奪取を目指すわけではない教会の活動は、市民社会論の枠組みのなかでも注目されてきた。

本章の目的は、このような宗教と政治をめぐる議論が、アフリカ研究においてどのようになされてきたのかを整理し、それを基点にしたときに、比較研究に向けたどのような視座を獲得しうるのかを考えることにある。まず第1節では、レンジャーのレビュー論文 (Ranger [1986]) に拠りつつ、植民地支配下のアフリカにおける宗教運動に関する研究史の流れを紹介する。次いで上の二つの文脈に重なるアフリカの宗教と政治に関する近年の研究動向に触れるが、とりあげる文献は夥しい研究蓄積のなかのごく一部であることを予めお断りしておきたい。そのうえで第2節において、南アフリカに議論的を絞る。「宗教と政治」という本章のテーマにかぎらず、とかく南アフリカに関する議論においてはその特殊性が強調されがちである。それゆえに顧みられることが少ない比較の視点を、南アフリカの文脈でどのように拓きうるのかを検討したい。

第1節 アフリカ研究における宗教と政治

1. 植民地支配下の宗教運動——レンジャーによる研究史整理から

レンジャーの「サブサハラ・アフリカにおける宗教運動と政治」(Ranger [1986]) は、10年以上前に書かれたものでありながら、現在でも優れたレビューとして定評がある。そのなかでレンジャーは、植民地支配下の宗教運動 (主に伝統宗教とキリスト教系のもの) に関する議論が、それが政治的である

か否かを問う初期のものから、宗教が内包する政治性、また政治が内包する宗教性に着目するものへと変容してきた様子を辿っている。まずはその議論を要約する形で研究史を整理することから始めよう。

まず、1950年代から1960年代にかけての研究は、メシアニックな独立教会運動をはじめとする植民地期の宗教運動について、もっぱら植民地支配への政治的抵抗、ナショナリズムの萌芽として捉えていたことに特徴があった。バランディエは植民地支配下の宗教運動を「近代ナショナリズムの前史」と捉え、またランテルナーリは独立教会運動は植民地支配が最も厳しい地域で生じたと考えた。土地収奪や強制労働などへの政治的反発として宗教運動の生起が説明されたのである (Balandier [1955], Lanternari [1963])。

しかし、宗教運動と反植民地主義とを直接に結びつけることに対しては、まもなく疑問の声があがるようになった。独立教会運動は、植民地主義への政治的挑戦というよりも、むしろ逃避的な性格のものであった、すなわち、政治権力を握ろうとするのではなく、そこから遠ざかろうとするものであった、という議論である。また、のちにランテルナーリ自身も、宗教運動を政治的なものとして捉えるのではなく、植民地支配による文化的、心理的ストレスが引き起こしたものと理解すべきであると考えようになった (Lanternari [1985])。こうした批判を通じて、宗教運動は反植民地主義から切り離され、さらには植民地状況が宗教運動に決定的な影響を及ぼしたとの見方も必ずしも正しくなく、植民地化以前との連続性に注意を払うべきだと見なされるようになった。

ただし、ここで否定された政治性とは、政治すなわち反植民地ナショナリズムであるとの暗黙の前提に立ったうえでの政治性であった。このように政治をきわめて限定的に捉えたうえで、ある宗教運動が政治的か、それとも文化的 (あるいは純粹に宗教的) かの問いを立てても、それは不毛な「政治／文化」二元論に終始せざるをえない。しかし近年では、この二元論を乗り越え、宗教運動の政治的重要性を再評価する潮流が出てきている。

まず、歴史学において社会史的な研究が進展し、一方的に支配、搾取され

る受動的な被抑圧者とみられていた人々が、実は日常のさまざまな場面において、植民地システムへの働きかけや抵抗の主体となっていたことが明らかになってきた (Beinart and Bundy [1987], Marks and Rathbone eds. [1982])。人間不在の経済社会構造ではなく、人々の意識や経験に注目するこのアプローチにおいては、人々の世界認識や抵抗のシンボリズムなどに関して、しばしば宗教が非常に重要な要素として扱われることになる。また、南アフリカの辺境住民と彼らを取り巻く支配システムとのダイナミックなインタラクションを詳細に描き出したコマロフ夫妻の一連の研究 (John Comaroff [1982], Jean Comaroff [1985], また Ranger [1986] 以降に出たものとして Comaroff and Comaroff [1991] [1997]) は、文化人類学以外の分野の研究者にも大きな影響を与えている。

このような宗教運動のロジックの政治的意義に関する論点にくわえ、「聖／俗」あるいは「宗教／政治」の二項対立の問い直しも盛んに行われるようになった。仮に政治的領域が純粹に世俗的なものではなく、神聖なシンボルや信念によっても定義、強化されるのだとすれば、宗教運動が提示する従来のものとは異なる新たなシンボル体系は、少なくとも潜在的には既存の秩序への政治的挑戦を意味することになる。たとえばフィールズは、植民地期中部アフリカにおける「ものみの塔」の信仰覚醒運動について、それが宗教的領域と世俗的領域との区分別が曖昧な状況で生じたものであり、しかも植民地構造の基盤に埋め込まれていた神が彼らの神と同族関係にあるものであったために、洗礼や異言といった宗教的行為が、そのまま合理的かつ効果的な政治的道具になりえたことを指摘している。宗教上の「異端」は、すなわち植民地への政治的「反逆」を意味したのである (Fields [1985: 21-22])⁽¹⁾。

2. 近年の研究動向——政治体制・制度との関連で

宗教と政治への関心の高まりに関して「はじめに」で触れた、宗教復興・紛争と政治的民主化という二つの文脈に重なる新しい動きがアフリカでもみ

られ、研究者の関心を引き起こしている。まず、紛争多発地帯であるアフリカにおいて、その一つの要因として宗教に関心が向かうのは自然なことである⁽²⁾。宗教的な差異や不寛容が紛争の主要因となることが多いわけではないが、紛争状況が宗教的言説によって解釈されたり、あるいは宗教的なシンボルによって人々が紛争に動員されるといったことが頻繁にみられるのである⁽³⁾。宗教復興についていえば、サブサハラ・アフリカにおいて、スーダンとナイジェリア北部を除いてイスラーム復興運動はさほど強力ではないが、キリスト教については1970年代以降、植民地期の宣教活動にルーツをもつ主流派教会とは異なる新しい教会が各地で急成長している。これらは主にペンテコステ派で、信仰覚醒（リヴァイヴァル）による霊的な生まれ変わり（ボーン・アゲイン）を重視することに特徴がある。やはり信仰覚醒にもとづき既存の教会を内側から刷新しようとするカリスマ運動も盛んに展開されている。宗教復興の高まり自体は世界的な現象で何もアフリカに限ったことではないが、アフリカでは多くの国家で政治制度が実質的に崩壊しているがゆえに、とくに宗教運動の政治的インプリケーションが大きくなるとの指摘がある。国家が機能不全に陥り、暴力や法を独占できない状況において、宗教が国家に代わる権力あるいは秩序の源と見なされるといっているのである（Ellis and ter Haar [1998: 193-196]）。

ペンテコステ派新興教会やカリスマ運動に関して、ギフォードや落合は、国家権力と結びつき、権威主義体制の擁護、正当化に奉仕する傾向を指摘している。その要因として彼らが共通してあげるのが、これらの教会／運動で説かれることの多い、「信仰の福音」（Faith Gospel）と呼ばれるタイプの教義である。「信仰の福音」によれば、神を信じる者は、富や健康など望むものをすべて神から与えられる。財をなした者は信仰篤いゆえにそのようになったのであり、逆に貧困や病に苦しむ者は、信仰が足りないと解釈される。そして政治権力もまた、神を畏れるゆえに神から与えられたものであると考えられるため、政府批判にはつながりにくい。すべてが信仰の問題に還元されるため、政府の責任が問われにくい、という面もある。これらの教会／運

動は宣教活動への政府の理解と便宜を求め、逆に政府はその影響力や動員力を利用しようとする。そのような持ちつ持たれつの関係が指摘されている (Gifford [1998], 落合 [1999])。いっぽうヘインズは、主流派教会と新興教会の位置づけについて、ちょうど逆の評価をしている。すなわち、体制と結びつく主流派教会のヘゲモニーに挑戦する「人民宗教」(popular religion)として新興教会を捉えているのである (Haynes [1995])。このような評価の差は、キリスト教をすべて一括りにして語れないのはもちろんのこと (ギフォードは“Christianities”という複数形の表現でその多様性を表現している <Gifford [1998: 325]>), 教派による一般化さえ難しいほどの多様性があることを示すものであろう。

また民主化との関連でいえば、1980年代末以降にアフリカ各地で生じた政治的民主化の過程で、国内のキリスト教会や聖職者が大きな役割を果たした例が多いことが指摘されている。たとえば、ベナンではコトヌ大司教が国民会議の開催や複数政党制への移行プロセスの監督の任にあたり、他の仏語圏諸国でもそのパターンが踏襲された (Joseph [1993: 241-242])。また、一党制に固執していたケニアのモイ政権に対して最も強い調子で批判を行ったのはケニア全国教会協議会であり (Gifford [1995: 3-5]), マラウイのバンダ政権が倒れるきっかけをつくったのはカトリック司祭らによる手紙であったとされる (Newell [1995])。

民主化運動に積極的に関与したのは主に主流派教会であった。ヘインズはこれを、ヘゲモニーを維持するために根本的変革をさけて微修正を行う「受動的革命」(グラムシ)として理解し、消極的な評価しか与えていない (Haynes [1995: ch.4])。いっぽう、ジョゼフやデグルシをはじめ、民主化と教会の関係を論じる文献は概ね教会の役割の積極的意義を強調する (Joseph [1993], de Gruchy [1995])。その論調は、ハンチントンが『第三の波』で「キリスト教と民主主義との間には強い相関関係がある」と述べていたことを想起させるものである (Huntington [1991: 72-73])。しかし、第一の文脈で紹介したギフォードや落合の議論にあるように、教会は民主化をむしろ阻

害する側にまわる場合もある。この点は、民主化を担う「市民社会」の主要な構成要素として教会が論じられる際に、ややもすると見落とされがちである。「市民社会」概念については、従来の議論で民主化との関係が強調されすぎたとの反省から、一定の形態や社会的役割をアприオリに想定せずに「市民社会」の主体を広く捉えたうえで、その内部の配置に注目すべきだという指摘がなされているが（たとえばWhite [1994], Kasfir [1998], 遠藤 [2000]）、アフリカにおける代表的な「市民社会」組織と見なされる教会に限ってみても、まったく同様のことがいえるだろう⁽⁴⁾。

第2節 南アフリカ研究における宗教と政治

1. アフリカ人独立教会

南アフリカのアフリカ人独立教会 (African Independent [or Initiated] Churches) に関しては、独立教会をエチオピアンとシオニストの二種類に分類してこの分野での先駆的業績となったSundkler [1961] 以降、厚い研究蓄積がある。前節で紹介した研究史の流れと同じく、南アフリカの独立教会研究においても、その政治性やナショナリズムとの関係はつねに議論の的となってきた。

たとえば、1978年の*Journal of Religion in Africa*誌上で行われた論争をみてみよう。ミルズはケープ植民地で生じた教会分離運動（白人教会から分離して独立教会をつくらうとする運動）をアフリカ人ナショナリズムの先駆けでありナショナリズムに貢献したものとしてみる従来の議論に異を唱え、この世の生についてはあきらめ、すべてキリスト再臨後の世界に希望を託すという「前千年王国」的なヴィジョンにもとづいたものと考えた⁽⁵⁾。そして、政治的な願望の実現を求めて行動したアフリカ人ナショナリストは、ほぼ例外なく既存の教会に残っていた人々であったことを指摘し、教会分離運動と

ナショナリズムとは結びつかず、むしろ正反対の立場にあったことを主張した (Mills [1978])。それに対してソーンダースは、教会分離運動とアフリカ人ナショナリズムとの区別がミルズのいうほど明瞭なものではないこと、そして白人との平等、自助、黒人の誇りと自意識、といった20世紀のナショナリズムにおいて繰り返し現れるアイデアが、19世紀末の独立教会において明確に現れていたことを指摘した (Saunders [1978])。

論争の争点もさることながら、付言しておいてよいと思われるのは、この議論は、現実のアパルトヘイト体制のなかで、たとえばザイオン・キリスト教会 (Zion Christian Church: ZCC) などの独立教会がしばしば非政治的、あるいは政権に協力的、とみられていたこととも深く関連していたということである。レンジャーは、政治性を問われることへの戸惑いを語る独立教会内部の声を引用しながら、この点がはらむ微妙な問題を的確に指摘している。信徒にとって独立教会は、ともに集い、祈り、礼拝し、聖霊による癒しを得る場であって、政治のための場ではない。にもかかわらず、なぜ教会の政治性を問われなければならないのか——。独立教会を理解しようとするアウトサイダーにとって、この言葉がいかに重いか、というのである (Ranger [1986: 20-21])。

この問題を、前節でも触れたベイナーとバンディ、およびコマロフは、政治や抵抗といった概念を拡大することによって乗り越えようとした。彼らのアプローチは、人々の自己認識に即して、受動的・非政治的と見られていた人々の「抵抗」を独立教会の役割に注目しながら描き、非政治的にみえる宗教的実践の「政治的」意味をみいだす点で共通している (Beinart and Bundy [1987], Comaroff [1985])。独立教会の政治的あるいは階級的ラディカリズムといった理論が妥当性を失い、かといってそれを純粹に宗教的あるいは受動的な虚偽意識として捉えるだけでは議論として不十分である、という袋小路にあって (Ranger [1986: 20])、それを打破する方向性をこれらの研究は指し示しているといえよう。しかし、研究上の意義とは別の次元で、ZCCのトップが大勢の信徒の前で当時のボータ (P. W. Botha) 大統領に祝福

を与えるという現実を前にすれば（1985年のイースターにおけるこの出来事は、ZCCの「抵抗」を描いたコマロフの著作が出た直後に生じたのである）、次のような問いが出てくるのはやむをえないことであった。「アパルトヘイト国家との対決からの戦略的な退却や、人種にもとづくその資本主義的秩序の象徴的拒絶は、果たして革命的な力へと変換されうるものなのだろうか」（Marks [1989: 230]）。

2. アフリカーナー・ナショナリズムとアパルトヘイト

アフリカーナー・ナショナリズムと人種主義イデオロギーの起源については、アフリカーナーの祖先が入植した17世紀以来の、脈々と続くカルヴァン派の伝統として説明するのがかつての通説であったし、いまでも根強く俗説として残っている。たとえばパターソンは、1830年代のフォルトレッカーたちが、旧約聖書を彼らの生活を映す鏡であると考え、また彼らが神によって選ばれ、荒野を通過して約束の地へと導かれる「選民」であるという意識にもとづいて、のちにグレートトレックと呼ばれることになる大移動を行ったと解釈していた。「ボーア人を今日のアフリカーナーへと作り上げたのは、旧約聖書とカルヴァン派の教えである」（Patterson [1957: 177]）。

しかし、このような「カルヴァン主義パラダイム」に対しては、ヘグザムやデュイトらによって、徹底的な批判がなされることになった（Hexham [1980], du Toit [1983] [1985]）。彼らは、フォルトレッカーたち自身が選民意識をもっていたことを否定する。フォルトレッカーとその子孫であるアフリカーナーの選民性、またグレートトレックと旧約聖書の「出エジプト」のエピソードとの重ね合わせなどは、19世紀終盤になってから後付け的につくられた物語、あるいは「政治的神話」（Thompson [1985]）である。その時期になってはじめて、イギリスの帝国主義的圧力に抗するべく、アフリカーンス語とオランダ改革派教会（Nederduits Gereformeerde Kerk: NGK）の信仰とを二本柱とするアフリカーナーの民族意識が形成された。アフリカーナ

ー・ナショナリズムも、それに付随する人種主義も、ともにきわめて近代的なものであるという認識は、学界にすでに定着しているといえるだろう。

上の議論では、原初カルヴァン主義の直接的影響は否定されても、19世紀後半のNGKがアフリカーナー・ナショナリズムや人種主義的政策に強い影響を与えたことが認められている。いっぽう、たとえばオメーラなどのネオ・マルクス派の歴史学者は、アパルトヘイトの起源を宗教的要素からではなく、白人社会の経済的状況から理解しようとする (O'Meara [1983])。しかし、アフリカーナー・ナショナリズムをすべて宗教に還元できないのは確かだが、峯 [1995] が指摘するようにオメーラは逆の極端に走り、経済決定論に落ち込んでしまっているともいえよう。この見解の相違は、南ア歴史研究における最大の論争である「リベラル史学」対「ネオ・マルクス派」という文脈によっても理解できるものだが、宗教的要素と経済的要素のどちらかが本質的であったのではなく、二つの要素がマラン (Daniel F. Malan) のもとで結び合わされたことが、1948年の国民党政権成立の大きな契機となったと考えるのではなかろうか⁽⁶⁾。

1948年に国民党の総選挙勝利を導いた要因として、ムーディは、「南アフリカ戦争以降、アフリカーナーに広く体系的に受け入れられるようになった象徴体系」、すなわち「アフリカーナー市民宗教」の有権者への浸透を指摘した (Moodie [1975])。「市民宗教」とは、もともとベラー [1973] がアメリカ政治に宗教的次元を与えてきたものを指して用いた用語で、森 [1996] によれば「みえざる国教」と呼びうるものである。ムーディの議論は宗教的要素を過重に重視し、また「カルヴァン主義パラダイム」的な側面があるとの指摘もあるが (du Toit [1983: 921])、アフリカーナー民族の聖なる歴史を基盤とする「アフリカーナーダム」(Afrikanerdom) の象徴構造や宗教的／政治的な神話をはじめ体系的に説明した研究として、画期的なものであった。

「市民宗教」は特定の教派の信仰を指すものではないが、個別の教会としては「祈りにおける国民党」と呼ばれるほどに国民党との関係が深いNGK

にとくに注目が集まってきた。NGKはアフリカーナー・ナショナリズムの核として国民党の支持基盤になっただけではなく、その政策にも大きな影響を与えた。1948年選挙のときに国民党が公約に掲げ、政権獲得後に実行に移すことになるアパルトヘイトは、もとはといえばNGKの神学者たちによって練り上げられたアイデアであり、他の教会がその誤りを広く認めてからもNGKはアパルトヘイトを頑なに支持し続けたのである。キングホーンは、「アフリカーナードム」神話にもとづく人種的民族的優越意識よりも、NGK神学に独特の聖書解釈のほうが、アパルトヘイトの宗教的要因としてよほど重要であると考えた。たとえば、「バベルの塔」(創世記第11章1～9節)の物語の解釈である。神がバベルにおいて諸民族を分けたのであるから、それを混淆させるのは神の意志に反すると考えられ、したがって諸民族の隔離、すなわちアパルトヘイトが神の意志にかなうものとして正当化された(Kinghorn [1994])。また、アフリカ系住民をいくつかの民族に分類、互いに隔離して文化的独自性を守り、それぞれに「ホームランド」を与える、という「分離発展」政策においても、やはり「バベルの塔」は中心的なモチーフとして現れていた(Norval [1996: 142-169])。

アパルトヘイト政策そのものだけでなく、国家による暴力もキリスト教を根拠として正当化された。1970年代後半以降、「共産主義の全面攻撃」に対する「全面戦略」が必要だとの考えにもとづいて軍や警察が強化されたが、チデスターは、この時期の軍や警察による反政府運動の武力弾圧が、共産主義者(すなわち無神論者)に対する「聖戦」としての意味をもたされたことを指摘している。すなわち、兵士は「福音という武器をもつ従軍牧師」に支えられ、「南アフリカのために生き、必要ならば死ぬという彼の天命を気づかされる」。このようなことが当時の南ア軍の訓練マニュアルには書かれており、軍の活動は神の意志を地上において実現するためのものとみなされたというのである(Chidester [1991: 89-95])。さらに、体制危機を乗り切るために三院制議会⁽⁷⁾と強力な大統領制を導入した1983年憲法において、「キリスト教の価値と文明的規範の保持」が国家目標の第一に掲げられ(前文)、

第2条では「南アフリカ共和国人民は、全能の神の主権を認め、神の導きに従う」と高らかに宣言された。南ア政府への国内外の批判が強まるなかで、どうにかして正統性を主張しつづけるために、「キリスト教国家」というセルフ・イメージがことさらに強調されたということだろう。

もっとも、NGKと国民党は、「祈りにおける国民党」という言葉のイメージほどに一体であったわけではない (Giliomee [1979], Posel [1987])。ノウデ (Bayers Naudé) をはじめ、アパルトヘイトに対する最も厳しい批判者はしばしばNGK内部から出たし、逆にポータ政権の「改革」路線にNGK右派はついてゆけず、1982年にはNGKの著名な神学者トロールニヒト (Andries Treurnicht) が国民党から決別して保守党を結成、選挙でも相当の支持を集めた。NGKと並び、やはり国民党と一体として語られることの多い秘密結社アフリカーナー・ブルーダーボンド (Afrikaner-Broederbond) が、O'Meara [1977] 以降に脱神秘化されてきているのと同様、NGKについても、アフリカーナー・ナショナリズムやアパルトヘイトとの結びつきの特異さに注目するととどまらない研究がもっと出てしかるべきだろう。たとえば Kuperus [1999] は国民党政権とNGKとの歴史的な関係を「国家—市民社会」関係の類型化のなかで理解しようとしているが、これは南アフリカの経験と比較可能な枠組みで理解する試みであると捉えることができる。

3. 解放運動と「預言者的キリスト教」

南アフリカにおいてキリスト教は、前項でみたのとは逆のベクトルに向かって、すなわちアフリカ人ナショナリズムや反アパルトヘイト運動とも結びついてきたことが知られている。とくに1970年代後半以降には、南アフリカ教会協議会 (South African Council of Churches: SACC) や南アフリカ・カトリック司教協議会 (South African Catholic Bishops' Conference: SACBC) などのキリスト教組織が解放運動に深く関わるようになった。多くのキリスト教指導者が同時に解放運動の指導者としての役割を担い、1978年に黒人とし

て初めてSACCの事務局長に就任したツツ (Desmond Tutu) は、南アフリカへの経済制裁を訴えて国際世論にも大きな影響を与えた。また、三院制議会の選挙ボイコット運動をはじめ、数々のキャンペーンを成功させて1980年代の解放運動の中心となった統一民主戦線 (United Democratic Front: UDF) は、オランダ改革派伝道教会 (NGKのカラード向け「娘教会」) の指導者ブサク (Allan Boesak) の呼びかけによって結成されたものであった。

南アフリカの解放運動とキリスト教の関係に焦点をあててきた研究者としては、まずはウォルシュをあげることができる。すでに1970年の著作 (Walsh [1970]) において初期ANCへのキリスト教の思想的影響を強調していたウォルシュは、NGK出身のノウデが設立したキリスト教研究所 (Christian Institute) に関する研究では、解放運動に思想的影響を与えるにとどまらず、自ら闘争の主体となるものとして、教会を捉えるに至っている (Walshe [1983])。この見方をさらに推し進めたのが、『南アフリカにおける預言者的キリスト教と解放運動』 (Walshe [1995]) である。「預言者的キリスト教」 (Prophetic Christianity) という言葉にウォルシュ自身は明確な定義を与えていないが、ウェーバー以来の「祭司」と「預言者」を対置する認識のなかでこれを理解することができるだろう (ウェーバー [1976])。祭司が既存の社会秩序を正当化し、その維持や安定化に貢献するのに対し、預言者は既存の秩序や制度を批判し、社会変革の方向性を指し示す。キリスト教の教えに依拠してアパルトヘイトにもとづく既成秩序に異を唱え、その変革を希求していった一連の動きを、ウォルシュは南アフリカにおける「預言者的キリスト教」と呼んだのである。

ウォルシュの関心は、その弟子であるボラーによってさらに掘り下げられている。ボラーは、SACCとSACBCが1980年代に著しく政治化した要因を政治的文脈、宗教的文脈、制度的文脈の三つの側面から検討し、この二つのキリスト教組織が政府との対立を強めていく過程を克明に描き出している (Borer [1998])。なお、聖公会やメソジスト教会といった狭い意味での教会よりも、むしろノウデのキリスト教研究所やプロテスタント系諸教会を傘下

に収めるSACCなど、超教派的な性格のキリスト教組織がより直接的で厳しい政府批判を行っていたということに注意したい。ウォルシュやボラーの研究が『教会対国家』(Walshe [1983])あるいは『国家への挑戦—政治的アクターとしての教会—』(Borer [1998])と題されていても、具体的に扱われているのは狭義の教会ではなく、このような組織やその指導者である。

そのほか、特筆されるべきは、実践的な関心、すなわち自覚的に「預言者的」役割を担おうとの意識から、神学者や教会史家が多く著作を著してきたことであろう。キリスト教会の歴史的役割を批判的に検討したものとしては、de Gruchy [1979] や Cochrane [1987] などがあるが、これらが「教会は何をなすべきか」という実践的な問題意識にもとづいて書かれたものであるのは一読して明らかである。また、前項でみたアパルトヘイト神学に対抗するための神学的基盤の構築も盛んに試みられ、総じて「状況神学」(Contextual Theology)と呼ばれている。その一つの極点のアパルトヘイトの「異端」宣言であった。国内での議論に続いて、プサクラの働きかけにより1982年に改革派教会世界連盟がアパルトヘイトを「異端」と宣言し、NGKを加盟資格停止措置とするに至ったのである (de Gruchy and Villa-Vicencio eds. [1983])。また1985年には、状況神学を最もよく体現した文書といわれる「カイロス文書」(Kairos Document)が出された。約150名の神学者・聖職者や平信徒の署名をとまう同文書は、南アフリカの教会の立場を「国家神学」(State Theology: アパルトヘイトを正当化する神学)、「教会神学」(Church Theology: アパルトヘイトを批判するが行動に結びつかない妥協的な神学)、「預言者神学」(Prophetic Theology: 国家との対決を恐れず被抑圧者の側に立って行動する神学)の三つに区別したうえで、「預言者神学」にもとづいて「神に従うために国家と対決し国家に逆らう」ことを呼びかけたものであった。同文書の反響は国外にも及び、解放運動への支援を内外の教会に呼びかけたハラレ宣言 (1985年末)、南ア政府の正統性を否定するルサカ宣言 (1987年) など、世界教会協議会の文書にもその強い影響がみられる (Borer [1998: 111])⁽⁸⁾。

なお、これらの動きはアフリカ人独立教会ではなく圧倒的に主流派教会の出身者によって担われていた。スングラーはシオニスト教会のリーダーシップを「預言者型」と表現したが、ここでいう「預言者」に求められるのは、何よりも「癒し」の能力であるとされる (Sundkler [1961: 109])。ところが、まさにこの「癒し」の中心性こそがZCCのようなシオニスト教会の「政治的黙従」を説明するものと考えられてきた (Schoffeleers [1991])。したがって、ウォルシュのいうところの「預言者的キリスト教」はこれと全く異なるものなのだが、その二つが等しく「預言者」と言い表されるということは、先にみた独立教会の政治性をめぐる議論を考え合わせるとき、それじたい興味深い現象である。二種類の「預言者」を視野に入れたうえで、「預言者的」であることと「政治的」であることとの関係を、いまいちど問い直す必要があるのかもしれない。

4. 比較分析に向けて——アメリカの黒人解放運動からの示唆

南アフリカ研究は、どうしてもアパルトヘイトの特殊性に引きずられ、比較の視点が欠落しがちである。「宗教と政治」というここでのテーマも例外ではない。独立教会については、レンジャーが中部アフリカの「ものみの塔」とともにケース・スタディとしてとりあげ (Ranger [1986: 20-32])、またミルズも西アフリカとの比較を念頭に議論しているように (Mills [1978])、比較可能な形で語られてきている。しかし、アパルトヘイトとキリスト教の結びつきに関しても、そして解放運動とキリスト教との関係についても、研究したいが政治状況に強く規定されてきたために、その経験を相対化する視角をなかなか獲得できないでいる。

とくに、解放運動と関連づけて「アパルトヘイト国家と闘う教会」という側面が強調されるとき⁹⁾、そこにはアパルトヘイトをめぐる対立を「キリスト教」対「共産主義」という図式に置き換えようとする南ア政府のプロパガンダを打ち砕き、さらには両者の価値を反転させた形でやはりこの対立図式

を暗黙のうちに共有する、マルクス主義の影響下にある解放運動研究をも乗り越えようとする意図が見え隠れする⁽¹⁰⁾。デグルシは、教会が南アフリカの民主化において産婆役を務めたとして、「ついにアパルトヘイトは、正義を求める闘争の真実と正統性による挑戦に耐えきれなくなったのである」と述べる (de Gruchy [1995: 211])。しかし、解放運動への教会の関与が、「アパルトヘイトの不正義に気づきながらも不十分な対応しかとれなかった教会が、次第に『預言者的』な役割を自覚していき、ついには解放運動を先導するに至る」という教会の「目覚め」の物語として目的論的に語られてしまうと、教会にそのような役割を担わせることを可能にした要因が何であったのかが、曖昧にぼかされてしまう。

この点を、アメリカの事例を参照しつつ、もう少し考えてみよう。アメリカの黒人解放運動の分析が、国際比較も視野に入れたその後の社会運動研究の基礎となっているからである。アメリカの公民権運動においても黒人教会が、黒人大学や全国黒人向上協会の支部と並んで、リーダーシップや抗議行動への参加者動員といった面で重要な役割を果たした。この三種類の組織のいずれも、白人の経済的圧力からは相対的に自由で、なかでも黒人教会は制度的に自律性が高く、白人の統制を最も受けにくかったということをマクアダムは指摘している (McAdam [1982: 135])。国内の他の種類の組織に比べて外部からの圧力に屈しにくいという点では、南アフリカの教会はアメリカ以上であったといえるだろう。1978年に政権の座に就いたポータは「改革」路線によって部分的に政治システムを開放する一方で、その範囲を超えた要求に対しては徹底的な弾圧を図ったが、その弾圧はすでに見たようにキリスト教のレトリックで正当化されていた。これは、NGKを支持基盤とする国民党のキリスト教ナショナリズムに由来するものでもあり、また冷戦状況下での西側諸国の支持を見込んだ戦略的なポーズでもあったわけだが、いずれにせよ南アフリカ政府が「キリスト教国家」を標榜していたことが、教会に相対的に自由な活動スペースを残すことになったのは間違いない。南ア政府はSACCやSACBCの政治化にブレーキをかけようと、活動内容の強制的な

調査、指導者の逮捕・拘留、そしてときに拷問など、さまざまな手段で圧力をかけ続けた。1988年にはSACCとSACBCの本部ビルが相次いで爆破テロの標的とされてもいる。しかし最後まで、この二組織が活動を禁止されることはなかったのである。

また、東西冷戦がこれらの教会組織の役割を後押しした面もある。フレドリクソンはアメリカと南アフリカの黒人解放運動を比較して、冷戦の影響が対照的なかたちで現れたことを指摘している。すなわち、第三世界の支持をめぐるアメリカとソ連とのライバル関係が公民権運動の追い風となったのに対して、「反共の砦」として西側の同盟国の地位を享受していた南アフリカ政府は、ますます強硬に抑圧的政策を推し進めたのである (Fredrickson [1995: 272-273])。しかし、1976年のソウェト蜂起後にアパルトヘイト批判の国際世論が高まるなかで、ようやく欧米諸国は南ア政府に見切りをつけ、1980年代に入って対南ア経済制裁に踏み切ると同時に、アパルトヘイト犠牲者への支援を本格的に開始した。そしてその際に主要なカウンターパートとなったのが、ANCやUDFといった政治組織ではなく、教会組織や教会と関係の深いNGOであった⁽¹¹⁾。これは露骨な政治介入の形を避けたということでもあるが、引き続き冷戦のなかでANCと東側諸国との強い関係を支援国が嫌ったことの現れでもあった。この時期に教会組織が解放運動において指導的な役割を果たしえた背景には、海外からの豊富な資金流入があったのである⁽¹²⁾。

なおフレドリクソンは、南アフリカの黒人意識運動における宗教的要素の大きさに着目し、アメリカのブラック・パワー運動では周縁的な扱いしか受けなかった黒人神学が、南ア黒人意識運動では大きな影響力をもつに至ったことも指摘している (Fredrickson [1995: 303-304])。その違いについてフレドリクソンは、アメリカのように黒人があからさまに政治的な主張をできるだけの自由が当時の南アフリカにはなかったという消極的な理由しかあげていないが (Fredrickson [1995: 314-315])、アパルトヘイト政策や政権の正統性の根拠が聖書に求められていたために、それを否定するための黒人神学や

そこから発展した状況神学がとりわけ重要視されたという面もあるのではないか。アパルトヘイトは状況神学によって「異端」と断じられたが、「異端」という言葉は、単なる「誤り」とは意味するところがまったく異なっている。アパルトヘイトが単に誤りであるだけではなく、その誤ったアパルトヘイトが神の名によって正当化されていたからこそ、「異端」という表現が出てくるのである⁽¹³⁾。このような「異端」を放置すれば教会全体の信頼を失墜させることにもなりかねない、との強い危機感が状況神学者にはあった。逆にNGKや「キリスト教国家」を標榜する南ア政府側とすれば、「異端」の烙印を押されるダメージは計り知れない。アパルトヘイトをめぐる神学論争が高度に政治的な意味をもちえた理由はここにある。宗教ロビーがいかに大きな力をもつとはいえ、あくまでも世俗国家をタテマエとするアメリカにおいては、神学がここまで政治的重要性を帯びることは考えられないのである。

おわりに

近代国家の世俗性が自明のものではなくなり、国家に内在する宗教性や、政治と宗教との根源的な結びつきが一般に認識されるようになったのはここ数年のことだが、アフリカは近代化・世俗化の歴史から取り残された「後進」地域として扱われてきただけに、かえってこのテーマに関して多くの優れた研究が蓄積されてきたという印象を受ける。宗教復興や民主化における宗教組織の役割といった世界的な関心の文脈が、アフリカにとっても無縁でないというだけではない。レンジャーやコマロフ夫妻の著作のように広く知られているものにかぎらず、どの地域であれ「宗教と政治」を考える際には、この分野におけるアフリカ研究の見聞から、多くの手がかりを得ることができだろう。

レンジャーのレビューに即してみたように、アフリカの政治分析にはしばしば文化人類学的なアプローチが用いられてきたが、もともと文化人類学は

「他者」を理解するための学問として構築されたために、足下の西洋近代国家の分析には適用されてこなかった。しかし、このような「他者」への眼差しを自らに向けて反転させるとき、近代国家の虚構性が見えてくるのではないだろうか。近代国家は、政教分離、すなわち宗教を政治の外部に追いやり世俗化することによって成立したことになっている。ところが、それもまた一つの神話にすぎなかったことが明らかになってきている⁽¹⁴⁾。アフリカの宗教と政治については「政教分離の西洋」と「政教未分離のアフリカ」との対比のなかで語られることが多いが（たとえばEllis and ter Haar [1998]）、同時にアフリカは西洋の姿を映す鏡として、西洋近代の源泉について多くを教えてくれるのである（Bayart [1993: 269]）⁽¹⁵⁾。

南アフリカについては、その特殊性ゆえに比較研究の対象になりにくい面があるのは否めない。しかし、アメリカの黒人解放運動を参照することで出てきた論点をみるかぎり、南アフリカの解放運動における教会の役割を、他の地域の社会運動との比較で論じることは十分に可能であると考えられる。運動を担う組織の特性や、国内の政治状況や国際環境がもたらす制約あるいは機会といったことは、社会運動研究の主要なテーマだからである⁽¹⁶⁾。また、他のアフリカ諸国に関する研究の視角を取り入れることによって、アフリカでは群を抜いて「近代的」な南アフリカという国家における「宗教と政治」の二項対立を問い直すことができるのではないか。植民地期の中部アフリカも、アパルトヘイト体制下の南アフリカも、宗教的「異端」が国家の正統性の問題に直結していた点で共通している。先に触れたフィールズの議論を援用すれば（Fields [1985]）、政治的領域と世俗的領域とが明確に分離していない状態で、アパルトヘイト体制のなかに埋め込まれた神と正統性を争ったという文脈で、「預言者的キリスト教」の政治的意義を理解することができるのである。

〔注〕 _____

(1) レンジャーがとりあげたのは主に植民地期に関する研究だが、ポストコロ

ニアル国家が内包する宗教的シンボリズムやメタファを分析したものとして、Bayart [1993], Comaroff and Comaroff eds. [1993], Geschiere [1997] などがある。ムリッド教団とセネガル国家との関係に着目し民族誌的手法によって「国家誌」を記述する小川 [1998] も、この流れの延長線上に位置づけられよう。

- (2) たとえば東アフリカ地域の紛争と宗教（キリスト教およびイスラーム）との関係を扱った論文集として、Hansen and Twaddle eds. [1995] がある。ただし、アフリカの紛争を文化や宗教、あるいは民族・部族間の差異によって説明する本質主義的な議論については、アフリカ研究者から再三批判されてきていることに留意したい（たとえば武内編 [2000]）。
- (3) その最も極端な例ともいえるリベリア内戦について、Gifford [1993] およびEllis [1999] を参照。
- (4) Kassimir [1998] は、ウガンダのカトリック教会を例にとりて教会が必ずしも「市民的」(civil) な役割を果たさないことを示し、教会が当然に民主化の主要な担い手となるとの「アプリオリな楽観主義」を戒めている。
- (5) 教会の努力によって千年王国が実現した後にキリストが再臨すると考える「後千年王国」論に対して、先にキリストが再臨し、しかるのちに千年王国が実現すると考える「前千年王国」論においては、いま存在しているこの世のことがらはすべてキリストによって裁かれるのを待つばかりであり、したがって、この世を改善しようという努力は無益なものと考えられる（森 [1996: 187-188]）。
- (6) 熱烈なアフリカーナー民族主義者でNGK牧師から政界に転じたマランは、1938年のフォルトレッカー100年祭に際し、100年前にフォルトレッカーがズールー軍と闘って勝利を取めた「血の河」のほとりで、アフリカーナーの大聴衆に向かって次のような演説を行った。すなわち、100年前の神に導かれたグレートトレックと同じように、「二度目のグレートトレック」がいままさに推し進められている。今度のトレックは都市へと向かうものであって、そこで白人は同じ労働市場にいる黒人との競争にさらされ苦しんでいる、あなたがたにとっての血の河は都市にあるのだ、と。ここにおいてマランは、白人労働者の都市労働市場における保護という経済的な「救済」を、アフリカーナーの聖なる歴史の一部をなすものとして約束しているのである（Chidester [1992: 195-196]）。
- (7) それまで白人のみで構成されていた国会を、白人、カラード、インド系人の三つの人種別議会から構成されるものへと改組した。カラード議会とインド系人議会は、教育や保健といったそれぞれの人種に「固有の問題」について決定権をもつことになったが、課税や安全保障、法と秩序といった「全体の問題」は三議会の合同国会が権限をもつとされ、その合同国会においては

議員定数の関係で必ず白人が多数派を占められるようになっていた。アフリカ人への参政権拡大はなく、アフリカ人に関わる問題は「全体の問題」として合同国会で扱われた。

- (8) 最近では、経済的苦境と政治的混乱を経験しているジンバブウェで、南アフリカのカイロス文書をモデルとした文書が1998年10月に出されている。南ア・カイロス文書の起草者が1985年当時を「カイロス」、すなわち神の目的のうちに定められた危機 (crisis) ないし転機 (moment of truth) と捉えていたのと同様、「預言者の行動への呼びかけ! 2000年大聖年に向けて——ジンバブウェ・カイロス文書」(A Call to Prophetic Action! Toward the Jubilee Year 2000: Zimbabwean Kairos Document) と題されたこの文書において、2000年を目前にする今このときこそジンバブウェの「カイロス」であり、すべてのクリスチャンが貧困、病気、パッド・ガバナンス、腐敗、恐怖、などの問題について考え、行動しなければならぬと宣言されている。ただし、この文書の知名度は南アフリカのカイロス文書に比べて格段に低く、影響力も限定されているようである。
- (9) 『教会の闘争』(de Gruchy [1979]), 『教会対国家』(Walshe [1983]), 『国家への挑戦』(Borer [1998]) といった著作タイトルを想起されたい。
- (10) 反アパルトヘイト運動指導者の宗教的背景を分析したグレイビルは、NGKと国民党の関係については研究も多く広く知られているのに対し、アフリカ人ナショナリズムにおけるキリスト教の役割に言及されることは少ないこと、そのため解放運動における主要なイデオロギーは共産主義であると一般に信じられており、それが冷戦下のアメリカの対南ア政策にも反映されていたことを指摘している (Graybill [1995: 1-2])。
- (11) たとえば、ヨーロッパ共同体によるアパルトヘイト犠牲者のための「特別プログラム」(1985年開始) の場合、SACCとSACBC、そして受け皿NGOとして新たに設立されたカギソ・トラスト (Kagiso Trust) を通じて支援がなされたが、カギソ・トラストの評議員には、ツツをはじめとする著名なキリスト教指導者が名を連ねていた (牧野 [1999])。
- (12) 「文明の衝突」的な図式で宗教の政治的重要性が再認識されるようになったのは冷戦終結後のことであるが、むしろ冷戦状況ゆえに宗教組織の政治的コミットメントが強まった例として1980年代の南アフリカを理解することができよう。国内資源 (資金的な、また組織的・人的な) に乏しいアフリカ諸国の教会にとって、国外の親教会や宣教団体とのトランスナショナルな性質のネットワークがもつ意味が非常に大きいとの指摘 (Gifford [1998]) も、あわせて想起しておきたい。
- (13) 『アパルトヘイトは異端だ』の序文においてブサクは、「異端」とは「単に誤った考えを表明するだけでなく、人間を神から、また人間同士を互いに

- 引き離すようなやり方で神の言を用いること」「神の言をその意図と目的に背いて用いること」であると説明している (de Gruchy and Villa-Vicencio eds. [1983: xii])。
- (14) そもそも、宗教が外部から観察可能な対象として措定され、一般概念として成立したのは、まさに世俗化という歴史的な文脈のなかにおいてであった (西谷 [2000: 6-7])。
- (15) ルジャンドル [1998] は、西洋近代国家の成り立ちに関する真理性を問うことが許されない「ドグマ」に精神分析の手法を駆使して切り込む自らの仕事を、「ドグマ人類学」と呼んでいる。訳者解説によれば、ルジャンドルは西アフリカでの産業整備や企業政策指導の実務に携わった経歴の持ち主で、自分にとっての最大の師はアフリカの人々だといっているそうである。
- (16) 社会運動の比較研究のための分析枠組みを整理したものとして、McAdam, McCarthy and Zald eds. [1996] およびMcAdam, Tarrow and Tilly [1997] がある。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- ウェーバー、マックス (武藤一雄・藺田宗人・藺田坦訳) [1976] 『宗教社会学』創文社。
- 遠藤貢 [2000] 「アフリカ『市民社会』論の展開」(『国際政治』第123号)。
- 小川了 [1998] 『可能性としての国家誌』世界思想社。
- 落合雄彦 [1999] 「ペンテコステ＝カリスマ運動とアフリカのネオ・パトリモニアル国家」(『国際政治』第121号)。
- 武内進一編 [2000] 『現代アフリカの紛争—歴史と主体—』アジア経済研究所。
- 中野実 [1998] 『宗教と政治』新評論。
- 西谷修 [2000] 「《宗教》と近代—世俗化のゆくえ—」(坂口ふみ・小林康夫・西谷修・中沢新一編『宗教への問い4 宗教と政治』岩波書店)。
- ベラー、ロバート・N (河合秀和訳) [1973] 「アメリカの市民宗教」(『社会変革と宗教倫理』未来社)。
- 牧野久美子 [1999] 「新生南アフリカの非営利セクター」(平野克己編『新生国家南アフリカの衝撃』アジア経済研究所)。
- [2000] 「南アフリカ共和国における宗教と政治」(『国際政治』第123号)。
- 峯陽一 [1995] 「『南アフリカの歴史』を読む—リベラル・ラディカル論争をこえて—」(レナード・トンプソン著、宮本正興・吉國恒雄・峯陽一訳『南アフリカの歴史』明石書店)。

- 森孝一 [1996] 『宗教からよむ「アメリカ」』 講談社選書メチエ。
 ルジャンドル, ピエール (西谷修訳) [1998] 『ロルティ伍長の犯罪—「父」を論
 じる—』 人文書院。

〈外国語文献〉

- Balandier, Georges [1955] *Sociologie actuelle de l'Afrique noire*, Paris: Presses
 Universitaires de France (井上兼行訳『黒アフリカ社会の研究—植民地状
 況とメシアニズム—』 紀伊国屋書店, 1983年)。
 Bayart, Jean-François [1993] *The State in Africa: The Politics of the Belly*,
 London: Longman.
 Bediako, Kwame [2000] "Africa and Christianity on the Threshold of the
 Third Millennium: The Religious Dimension," *African Affairs*, Vol.99,
 No.395.
 Beinart, William and Colin Bundy [1987] *Hidden Struggles in Rural South
 Africa: Politics & Popular Movements in the Transkei & Eastern Cape,
 1890-1930*, London: James Currey.
 Borer, Tristan Anne [1998] *Challenging the State: Churches as Political Actors
 in South Africa, 1980-1994*, Notre Dame, Indiana: University of Notre
 Dame Press.
 Chidester, David [1991] *Shots in the Street: Violence and Religion in South
 Africa*, Boston: Beacon Press.
 — [1992] *Religions of South Africa*, London: Routledge.
 Chidester, David, Judy Tobler and Darrel Wratten eds. [1997] *Christianity in
 South Africa: An Annotated Bibliography*, Westport, Connecticut: Green-
 wood Press.
 Cochrane, James R. [1987] *Servants of Power: The Role of English-Speaking
 Churches in South Africa 1903-1930: Toward a Critical Theology via a
 Historical Analysis of the Anglican and Methodist Churches*, Johannes-
 burg: Ravan.
 Comaroff, Jean [1985] *Body of Power, Spirit of Resistance: The Culture and
 History of a South African People*, Chicago: University of Chicago Press.
 Comaroff, Jean, and John Comaroff [1991] *Of Revelation and Revolution
 Volume I: Christianity, Colonialism, and Consciousness in South Africa*,
 Chicago: University of Chicago Press.
 Comaroff, Jean and John Comaroff eds. [1993] *Modernity and Its Malcontents:
 Ritual and Power in Postcolonial Africa*, Chicago: University of Chicago
 Press.

- Comaroff, John L. [1982] "Dialectical Systems, History and Anthropology," *Journal of Southern African Studies*, Vol.8, No.2.
- Comaroff, John L. and Jean Comaroff [1997] *Of Revelation and Revolution Volume II: The Dialectics of Modernity on a South African Frontier*, Chicago: University of Chicago Press.
- De Gruchy, John W. [1979] *The Church Struggle in South Africa*, Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co.
- [1995] *Christianity and Democracy*, Cape Town: David Philip.
- De Gruchy, John W. and Charles Villa-Vicencio eds. [1983] *Apartheid Is a Heresy*, Cape Town: David Philip.
- Du Toit, André [1983] "No Chosen People: The Myth of the Calvinist Origins of Afrikaner Nationalism and Racial Ideology," *American Historical Review*, Vol.88.
- [1985] "Puritans in Africa? Afrikaner 'Calvinism' and Kuyperian Neo-Calvinism in Late Nineteenth-Century South Africa," *Comparative Studies in History and Society*, Vol.27.
- Ellis, Stephen and Gerrie ter Haar [1998] "Religion and Politics in Sub-Saharan Africa," *Journal of Modern African Studies*, Vol.36, No.2.
- Ellis, Stephen [1999] *The Mask of Anarchy: The Destruction of Liberia and the Religious Dimension of an African Civil War*, London: Hurst & Co.
- Elphick, Richard and Rodney Davenport eds. [1997] *Christianity in South Africa: A Political, Social and Cultural History*, Berkeley: University of California Press.
- Fields, Karen E. [1985] *Revival and Rebellion in Colonial Central Africa*, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Fredrickson, George M. [1995] *Black Liberation: A Comparative History of Black Ideologies in the United States and South Africa*, New York: Oxford University Press.
- Geschiere, Peter [1997] *The Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa*, Charlottesville and London: University Press of Virginia.
- Gifford, Paul [1991] *The New Crusaders: Christianity and the New Right in Southern Africa*, London: Pluto.
- [1993] *Christianity and Politics in Doe's Liberia*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [1995] "Introduction: Democratisation and the Churches," in Paul Gifford ed., *The Christian Churches and the Democratisation of Africa*, Leiden: E.

- J. Brill.
- [1998] *African Christianity: Its Public Role*, London: Hurst & Co.
- Gifford, Paul ed. [1995] *The Christian Churches and the Democratisation of Africa*, Leiden: E. J. Brill.
- Giliomee, Hermann [1979] “Afrikaner Politics: How the System Works,” in Heribert Adam and Hermann Giliomee, *Ethnic Power Mobilized: Can South Africa Change?* New Haven: Yale University Press.
- Graybill, Lyn S. [1995] *Religion and Resistance Politics in South Africa*, Westport: Praeger.
- Hansen, Holger Bernt and Michael Twaddle eds. [1995] *Religion and Politics in East Africa: The Period since Independence*, London: James Currey.
- Haynes, Jeff [1995] “Popular Religion and Politics in Sub-Saharan Africa,” *Third World Quarterly*, Vol.16, No.1.
- [1996] *Religion and Politics in Africa*, London: Zed Books.
- Hexham, Irving [1980] “Dutch Calvinism and the Development of Afrikaner Nationalism,” *African Affairs*, Vol.79, No.315.
- [1981] *The Irony of Apartheid: The Struggle for National Independence of Afrikaner Calvinism against British Imperialism*, New York; Toronto: Edwin Mellin Press.
- Huntington, Samuel P. [1991] *The Third Wave: Democratization in the Late Twentieth Century*, Norman: University of Oklahoma Press (坪郷實・中道寿一・薮野祐三訳『第三の波—20世紀後半の民主化—』三嶺書房, 1995年).
- [1993] “The Clash of Civilizations?” *Foreign Affairs*, Summer 1993.
- [1996] *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York: Simon & Schuster (鈴木主税訳『文明の衝突』集英社, 1998年).
- Joseph, Richard [1993] “The Christian Churches and Democracy in Contemporary Africa,” in John Witte, Jr. ed., *Christianity and Democracy in Global Context*, Boulder: Westview.
- Kasfir, Nelson [1998] “The Conventional Notion of Civil Society: A Critique,” *Commonwealth and Comparative Politics*, Vol.36, No.2.
- Kassimir, Ronald [1998] “The Social Power of Religious Organisation and Civil Society: The Catholic Church in Uganda,” *Commonwealth and Comparative Politics*, Vol.36, No.2.
- Kepel, Gilles [1991] *La revanche de Dieu*, Paris: Seuil (中島ひかる訳『宗教の復讐』晶文社, 1992年).
- Kinghorn, Johan [1994] “Social Cosmology, Religion and Afrikaner Ethnicity,”

- Journal of Southern African Studies*, Vol.20, No.3.
- Kuperus, Tracy [1999] *State, Civil Society and Apartheid in South Africa: An Examination of Dutch Reformed Church-State Relations*, London: Macmillan.
- Lanternari, V. [1963] *The Religions of the Oppressed: A Study of Modern Messianic Cults*, New York: Knopf (堀一郎・中牧弘允訳『虐げられた者の宗教—近代メシア運動の研究—』新泉社, 1976年).
- [1985] “Revolution and/or Integration in African Socio-Religious Movements,” in B. Lincoln ed., *Religion, Rebellion, Revolution*, London: Macmillan.
- Marks, Shula [1989] “Cultures of Subordination and Subversion,” *Social History*, Vol.14, No.1.
- Marks, Shula and Richard Rathbone eds. [1982] *Industrialisation and Social Change in South Africa: African Class Formation, Culture, and Consciousness, 1870-1930*, New York: Longman.
- McAdam, Doug [1982] *Political Process and the Development of Black Insurgency 1930-1970*, Chicago: University of Chicago Press.
- McAdam, Doug, John D. McCarthy and Mayer N. Zald eds. [1996] *Comparative Perspectives on Social Movements: Political Opportunities, Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge: Cambridge University Press.
- McAdam, Doug, Sidney Tarrow and Charles Tilly [1997] “Toward an Integrated Perspectives on Social Movements and Revolution,” in Mark Irving Linchback and Alan S. Zuckerman eds., *Comparative Politics: Rationality, Culture, and Structure*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Mills, Wallace G. [1978] “The Fork in the Road: Religious Separatism versus African Nationalism in the Cape Colony, 1800-1910,” *Journal of Religion in Africa*, Vol.9, No.1.
- Moodie, T. Dunbar [1975] *The Rise of Afrikanerdom: Power, Apartheid, and the Afrikaner Civil Religion*, Berkeley: University of California Press.
- Newell, Jonathan [1995] “‘A Moment of Truth’?: The Church and Political Change in Malawi, 1992,” *Journal of Modern African Studies*, Vol.33, No.2.
- Norval, Aletta J. [1996] *Deconstructing Apartheid Discourse*, London: Verso.
- O'Meara, Dan [1977] “The Afrikaner Broederbond 1927-1948: Class Vanguard of Afrikaner Nationalism,” *Journal of Southern African Studies*,

Vol.3, No.2.

- [1983] *Volkskapitalisme: Class Capital and Ideology in the Development of Afrikaner Nationalism 1934-1948*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Patterson, Sheila [1957] *The Last Trek: A Study of the Boer People and the Afrikaner Nation*, London: Routledge & Kegan Paul.
- Posel, Deborah [1987] "The Meaning of Apartheid before 1948: Conflicting Interests and Forces within the Afrikaner Nationalist Alliance," *Journal of Southern African Studies*, Vol. 14, No. 1.
- Prozesky, Martin ed. [1990] *Christianity amidst Apartheid*, New York: St. Martin's Press.
- Ranger, Terence O. [1986] "Religious Movements and Politics in Sub-Saharan Africa," *African Studies Review*, Vol.29, No.2.
- Saunders, Christopher [1978] "African Nationalism and Religious Independence in Cape Colony: A Comment," *Journal of Religion in Africa*, Vol.9, No.3.
- Schoffeleers, Matthew [1991] "Ritual Healing and Political Acquiescence: The Case of the Zionist Churches in Southern Africa," *Africa*, Vol.60, No.1.
- Sundkler, Bengt G. M. [1961] *Bantu Prophets in South Africa*, second ed., London: Oxford University Press.
- Thompson, Leonard [1985] *The Political Mythology of Apartheid*, New Haven: Yale University Press.
- Walshe, Peter [1970] *The Rise of African Nationalism in South Africa: The African National Congress 1912-1952*, London: C. Hurst and Company.
- [1983] *Church versus State in South Africa: The Case of the Christian Institute*, London: C. Hurst and Company.
- [1995] *Prophetic Christianity and the Liberation Movement in South Africa*, Pietermaritzburg: Cluster Publications.
- White, Gordon [1994] "Civil Society, Democratization and Development (I): Clearing the Analytical Ground," *Democratization*, Vol.1, No.3.
- Witte, John, Jr. ed. [1993] *Christianity and Democracy in Global Context*, Boulder: Westview.